

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 篠原 俊一

平成二十四年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

本年は当協会が昭和五十七年に設立されて、三十周年という節目の年を迎えます。また、平成元年以来発行してまいりました特集「ながさきの空」も本年度で第二十三集となり創立三十周年を記念した特集号を予定しております。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度の協会へのご来訪者は、県内外から三、〇〇〇人を超えました。

本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十四年

辰年に因んで

越中 哲也

先ずは 新年の御祝詞を申し上げます。

次いで本年は長崎歴史文化協会創立三十周年を迎える年となり、これ一重に皆様方に御協力をいただいた御陰と感謝申し上げます。本当に有難う御座いました。

さて、年の始めの「ながさきの空」は恒例により「暦み話」より始めることに致します。

中国の暦法(旧暦)によりますと、今年の「干支」の「干」は「壬」という文字になり、支は「辰」という文字になる。干は「甲乙丙…」と十文字に分けて説明されている。干とは「幹」の文字を略したもので其の意は物の成立



圓山應挙筆 雲龍図
(長崎純心大学博物館蔵)

今回の挿絵に使用した圓山應挙筆雲龍の図は「黒龍」の林家の所蔵品で、昭和五十八年六月「かよこ桜」の御縁で私に「原爆平和の願い」を込めて御使用下さいとの事であったので「平和を願う」長崎純心大学博物館」に収蔵活用して戴いた。

「黒龍社」の事については吉井勇先生が其の記念碑に次の歌を残されている。黒龍という名を石に刻ませて 父をこそ思え母をこそ思え

長崎の江戸時代における年中行事を記したものとしては寛政九年(一七九九)長崎の人、野口文龍が著した『長崎歳事記』が詳しい。(長崎県史・史料編四)これを中心に古賀十二郎先生は「長崎市史風俗編・年中行事」を編纂されている。

同書の一月一日は「正月元旦 家々に若水とて暁方より恵方の水を汲みとり、湯をわかし茶を煮る」から始まっている。水道がまだ無い時代である。どこの井戸(泉)まで水を汲みに行かれたのでありましようか。

茶を煮る時に「此の朝に、若水手拭といつて新らたに手拭を用意しておく」このお茶を神棚・恵方棚・佛壇を清めて燈火をかかげてお供えし、次いで雑煮を供し終わって、家内一同集まって屠蘇を飲み相い食す。各自の膳には、向うに「うら白」(葉)を敷き、其の上に塩鯛二、三枚づつをすえる。これを居り鯛という。この日来客あれば先づ「手かけ台」を持ち出し屠蘇と雑煮を進める。盃は三方の上に「うら白」をしき、其の上に重ねおき出す。

手かけ台は一名蓬菜とよぶ。白木三方台に白紙をたれ、その上に九合の白米を盛り米の中央に松の枝(根引の松という)其の周囲に包米、包塩、昆布、えび、橙、橘、ほん田わら(干海草)、栗、柿、かやの実などを飾る。

風信

○元日は、旧年中に使用した家財は全て用ゆる事なく休める事。この日より「チャンメラ吹き」各家を廻る。ともの者、小銅鑼、片はり太鼓を持つては

している本体を示す「木火土金水」の五行が一字ごとに上下(兄弟)にわかれると説明されている。例えば「木」を上下に分けて木甲・木乙、「火」を上下に分けて火丙・火丁…であると言う。支は其の「幹」干を支えるもので十二種類に分けて説明してある。その十二とは滋(子)であり、紐(丑)であり、演(寅)である…と十二支の説明がある。では何故十二支が動物と関係があるのかと言うと、幹を支えるには「身近にいて走り回り世話をする物」との意が示されていると言う。

先輩方にこの事をおききたら、「何んだか意味が良くわからない事もあり、古代人のコジツケでしようね」との御返事をお聞きした事もあった。

今年の干支は「壬辰」の年となり、我が国では之を「ミズノエ・タツ」の年とよんでいる。「壬」の文字の意味は、本字は「任」と書き、暦法の古書には「陽氣が万物を下に任養する意也」と記してあるので今年次第に育つてゆくとの意である。

次に「辰」の文字は「シン」と読み「伸びるの意」とあり、動物では龍が配されている。兎も角、今年「壬辰の年」で良い年を迎える事になるであらう。

但し之は旧暦の説明ですので、旧の一月一日・現在の一月二十三日以後の事となるのである。

ところで長崎では龍踊と書いて「龍」をジャと読ませています。龍と蛇とは違うのですが、なぜか長崎では「龍」をジャと読ませているのです。本来の龍は「鱗のある蛟龍」。「翼のある応龍」。「角のある蚪龍」。「角なきを虯龍」と中国の古書「博雅」には説明がありましたし「述異記」には「蛟千年にして化して龍となる」とあり、龍は靈物であり君主にも喩えられ中国の古い辞書「広雅」には「龍は君也」とあり、天子の顔は「龍顔」天子の乗り物は「龍駕」、天子の徳は「龍徳」などと記してありました。

龍の文字は、立と月と巳の組み合わせで「立」は童の略で音符をあらわし、月は肉をあらわし、巳は其の肉が飛びはねる形であるとの説明がつ

や子たつ。家々小銭をあたう。十四、五文也。チャンメラ吹は無刀にて古き袴を着せり。又、女達二人三人とツレあつて黒木錦にて面をつつみ、槌をふつて大黒舞をうたひ或は松尽しなどを歌ひ或は恵美須、大黒などの姿をまねて来る。米をあたう。

○二日は小商人ども商ひ初めとて、大人・子供にかぎらず朝はやくよりナマコを売ある。其の声かまびすし。家々この日始めて銭をつかいナマコを買つて鱈に加う。この時、直段の高下を論せず家に呼び入れ、器を出せばナマコを入れる。家人は其の年の月により十二月の時は十二文、十三月の時は十三文を渡す。これ古来より我が長崎の風習なり。

○四日神社の人々装束をつけ奉行所に至り節を拝す。右相済ませた後、各寺社より札守または杉楊子、曲物に入れたる納豆・金山寺味噌など配りものあり。此日より市中踏絵はじまる。町順あり。絵板十九枚。町内の乙名・組頭・町役人つきそい。家毎にいたり名前をよび、踏絵を終えると家内帳(踏絵帳)に記載してある各自の名前の下に印形をもらい「是を改めの徴とす」と記してある。この行事八日で終り町の人達は「ほっと」したそうである。そしてこの最終日、丸山遊女達の踏絵があり、其の時の遊女達は「美麗を尽したものであったので」市中の貴賤ともに、姿をかえ面をかくし遊女の踏絵見物に至り「大きわざであったと記してある。

○七日 家々膾をし七種のごうすひを煮て神佛に供え相祝す。

○十一日 鏡ひらき、市中の家々すへ置たる鏡餅をおろし善哉餅とす。商家等は「帳祝ひ」として新たに諸帳面など仕立表題などを書きて相祝。

○十三日 長崎御代官支配の長崎村、浦上村、山里村、はじめ野母村・高浜村・川原村・茂木村・日見村・古賀村・椏島村へ御代官手代・下役召連れ相回る。

○十四日 夜より十五日夜まで土籠打ちとて、町々男兒ども門に立ちてたる門松の竹を取りおきて打物を造り、家々門口に至り口々に「モグラ打は科ナナ」と言ふてフミ石を打つ。

○十五日 家に膾をきぎみ、小豆粥に餅を入れて煮る。この日大釜の上におすすめたる荒神様にお供えした「三ツ重ねの大鏡餅」をおろす。

○十六日 ヤブ入とて奉公人の男女・家の主人に暇を乞ひて家に帰り在所に行く。○廿日 廿日正月という。家々膾をつくり、餅の屑米を集め、赤餅にし神棚・荒神様に供ふ。家々は煮込とて、

家の玄関に下げたる幸木より鯛の骨・大根・牛房・大豆を取りおろし大鍋に入れ当日の珍味とする。

